

## ハイデガーの「形式的告示」

——「何であるか」と「いかにあるか」の連繫に着目して——<sup>1</sup>

山崎 諒

### はじめに

本稿の眼目は、初期・前期ハイデガー独特の「方法」である「形式的告示 (formale Anzeige)」について、「何であるか (Was-sein)」と「いかにあるか (Wie-sein)」の連繫という観点から、またフッサールの「方法」である「現象学的還元」を引き合いに出すことで分析することにある。いま述べた観点は恣意的なものではなく、ハイデガーが 1925 年夏学期講義『時間概念の歴史への序説』(GA 20; 以下『序説』と表記)で行っている分析のゆえであるが、同講義では「形式的告示」という表現が登場しているわけではない。そこで本稿では、当該箇所での分析を検討することによって、ハイデガー自身の「方法」に帰されるべき幾つかの条件を析出し、それらが「形式的告示」に当てはまることを確認する。そのさい本稿は、ハイデガーにとって「いかにあるか」だけではなく、「何であるか」と「いかにあるか」の連繫(「何で・いかに・あるか (Was- und Wie-sein)»)こそが重要だったのだ、と主張することになる。ハイデガーはしばしば、この「何で・いかに・あるか」のことを端的に「存在」と呼んだり、あるいは「存在体制 (Seinsverfassung)」と呼んだりしている。そして、「何であるか」と「いかにあるか」の分離がフッサールの根本的な問題点であり、ハイデガーの方法はそれを乗り越えることを目指しているのである (vgl. GA 9, 131; GA 61; 18)。

なお、本稿はハイデガーによるフッサールの還元批判を扱いはするものの、それによって「形式的告示」がハイデガーにおける「還元」である、と主張するものではない。ハイデガーにおける「還元」の所在は、もはや古典的と云ってもよいかもしい問題である。つとに知られているように、『存在と時間』の頃のハイデガーは、みずからの探求を「現象学」と呼びつつも、「現象学的還元」というフッサール現象学的方法的核心については触れていない。それゆ

え、この件は研究史上、ハイデガー側からもフッサール側からも——還元の必要性の検討などのために——論及されてきた。かつてハイデガー研究上では、ハイデガーには「還元」がない、というのが定説であった。というのも、『存在と時間』には「還元」という言葉が登場せず、ハイデガーは還元を理解せず棄てたのだ、というフッサールの評定が疑問視されることがなかったからである。しかし、1975 年に『根本諸問題』講義が公刊されると、その状況はがらりと変わった——同講義でハイデガーは、「還元」について明瞭に語っていたからである。一応、引用しておこう。

フッサールにとって現象学的還元とは [...], 事物や人格の世界へと入りこんで生きている人間がもつ自然的態度から、客観が意識の相関者として構成される場となる超越論的な意識生とそのノエシス—ノエマ的な体験へと、現象学的な視線を連れもどす方法のことである。私たちにあって現象学的還元とは、存在者のいつもどおりの決まった把握から、当の存在者の存在の理解 [...] へと、現象学的な視線を連れもどすことを意味している (GA24, 29) .

さて、『根本諸問題』講義の公刊を承けて、ハイデガー（とりわけ『存在と時間』）における「還元」の所在については、さまざまな解釈が示されてきた。たとえば、『存在と時間』においては、実在的存在者にたいする判断保留としての還元は前提とされているとするもの (Crowell (2001); Tugendhat (1970)) , 道具などの欠損状況を「還元」とするもの (Bernet (1994)) , 「不安」を「還元」とするもの (荒畑 (2001) ; Bernet (1994)) , 「先駆的決意性」を「還元」とするもの (丸山 (2019)) , そして「形式的告示」を「還元」とするもの (Russell (2008); 若見 (2004)) などである。これらの論稿はそれぞれ一定の説得性を有しているものの、それぞれ何を「還元」の要諦としているのかが異なっているのである。そのようななか、何を「還元」の肝とするのかを十分に論証することは、本稿ではとてもできることではない。したがって、本稿はフッサールの還元については、ハイデガーが批判しているかぎり、そしてハイデガーがある意味でその反対を行こうとしているものとして考察するにとどめたい。

そこで、本稿では以下のように論述をすすめていく。まずは、『序説』講義におけるハイデガーの還元批判を検討し、そこから三つの仮説ないし条件をハイデガー独自の方法に見込む(第1章)。そのさい、とりわけハイデガー初期・前期の思索における「何であるか」と「いかにあるか」について論じ、ハイデガーが「何であるか」を等閑視して「いかにあるか」だけを扱っているのではなく、まさに両者を統一的に論じようとしている、ということを示す(第2章)。以上を承けて、「形式的告示」についてのハイデガーの記述を参照し、それらの条件が充たされていることを確認する(第3章)。そして、『存在と時間』における現存在の実存論的分析論を瞥見し、そこで「形式的告示」が機能し、「何であるか」と「いかにあるか」が統一的に述べられていることを示す(第4章)。

## 1. 『序説』講義におけるハイデガーによる還元批判の検討

本章では、『序説』講義におけるハイデガーによるフッサールの還元批判を検討することで、ハイデガーが用いる現象学的方法についての三つの仮説を立てることになる。「実在性」・「個別性」・「何であるか」と「いかにあるか」という三点にかかわるそれらの仮説は、ハイデガー自身の方法に課される条件であるとも云えるだろう。

さて、同講義でのハイデガーは、フッサールの「現象学的還元」によって「志向的なもの」に迫ることが、その存在を捉えることになるのかを疑問視する。そこでハイデガーは、「現象学的還元」を構成するところの「超越論的還元」と「形相的還元」の双方にたいして批判を向けることになる。

まず、「超越論的還元」にかんしては、それがエポケーによって「実在的に定立されるものを度外視することにおいて、あらゆる実在定立そのものから身を退くことによって遂行される」(GA 20, 150)と述べ<sup>2</sup>、それゆえに志向的なものの存在を扱うのに不相当だと述べられる——「還元の意味においては、唯一そのうえでのみ志向的なものの存在を問うことのできるような地盤がまさに手から零れおちてしまうのである」(GA 20, 150)。

つぎに「形相的還元」については、それが対象の「個別相」を度外視し、そ

れによって「何」だけが問われて「存在の仕方」は問われなくなるとされる——「作用の〈何〉，作用の構造だけが還元によって考察され，存在する仕方，作用の存在そのものはそのさい主題にならない」（GA 20, 151）。

それゆえ，ハイデガーは「実在性」も「個別性」も度外視するフッサールの「還元」によっては，志向的なものの存在はけっして問われない，と断ずるのである。

こうした問い〔作用の存在 [Existenz] についての問い〕は，超越論的なものでも形相的なものでも，還元においては立てられない。そればかりでなく，この問いは還元によってまさに失われてしまうのである。〈何 [Was]〉ということからは，私が〈事 [Daß]〉の意味と様式について何事かを知ることにはけっしてない [...]（GA 20, 151 f.）。

ここでハイデガーはさらに，イデアチオン（形相的還元）が「実在的個別相」の度外視とされることの理由を，「いかなる存在者の〈何〉もその存在[Existenz]を度外視して規定されうる」（GA 20, 152）という想定に置く。そうして，「その〈何〉がまさに〈存在すること〉であり，それ以外ではありえない」（GA 20, 152）存在者を示唆し，こうしたものについてはフッサールの「還元」は無力だと述べるのである。もちろん，この存在者とは現存在のことであろう<sup>3</sup>。それゆえ，逆に云えば，現存在の「何であるか」（厳密には「誰であるか」）は，その「いかにあるか」<sup>4</sup>との連繋のなかで見られる，と云えるだろう。

以上のような批判がフッサールの「還元」に向けられているとすれば，その批判を行っているハイデガー自身の「方法」は，それらを免れていなければならないだろう。それゆえ，そこにはつぎのような三つの仮説ないし条件が見込まれることになると思われる。

- 1) 対象の「実在性」を度外視しない<sup>5</sup>。
- 2) 対象の「個別性」を度外視しない。
- 3) 対象の「何であるか」と「いかにあるか」を統一的に探求する。

ただし、この講義でのハイデガーによる批判の争点は、もっぱら「志向的なもの」をめぐるものであるため、本稿ではさしあたり、以上の条件も「志向的なもの」の「本質」を探究する手段としての「還元」にのみ適用されるものと見なす<sup>6</sup>。

さて、ここで幾つか留意したいことがある。第一に、うえで見たように、ハイデガーはエポケーにたいして否定的である。だが、ハイデガー自身も指摘しているように、フッサールにとってエポケーは、還元を経たあとに実在性を実在性として考察するためにある、とされるだろう (vgl. GA 20, 150)。それでは、それにもかかわらずエポケーを否定するハイデガーは、いかにして実在性を実在性として——存在を存在として考察するのだろうか。

フッサールにとってのエポケーは、世界内の対象がそれ自体で存在している、という素朴な定立を保留し、対象の実在にたいする意識の寄与を描き出すことにひとつの意義がある。しかし、ハイデガーの見るフッサールの問題点は、存在がもっぱら眼前存在として把握されていることである<sup>7</sup>。つまり、ハイデガーからすれば、フッサールは「手許性」や「眼前性」、「実存」といった存在様態の区別を（すくなくとも適切には）立てられていないのである。

このことを踏まえれば、以下のように云えると思われる。つまり、フッサールにおいては、意識の「構成的な」寄与を吟味するには、対象の素朴な実在定立を一旦は保留しなければならない。だが、フッサールはそのさい、過剰なことをしているとハイデガーには見えたのではないか。つまり、存在者の存在の仕方を見るために存在をまるごと保留して度外視する必要はないのではないか。ハイデガーにとって「眼前存在」は存在様態のひとつでしかない。ゆえに、ハイデガーには存在者の「存在」をまるごと保留する必要などないし、むしろそれによって存在の仕方を捉える術はなくなる、と見えたのである (vgl. GA 20, 151 f.)。そうすると、ハイデガーにとって存在者の存在を見るためには、いわば存在全般のスイッチを切るのではなく、存在様態<sup>8</sup>の交代（スイッチ）こそが肝要だったのではないか<sup>9</sup>。

第二に、本稿における三つ目の条件にも絡むのだが、ここでのハイデガーの還元批判は、超越論的還元と形相的還元の双方にかかわっている、ということである。あるいは、「いかなる存在者の〈何〉もその存在を度外視して規定さ

れうる」(GA 20, 152) という根本想定にもかかわることである。管見のかぎり、従来の還元研究では超越論的還元には着目しても、形相的還元に着目されることはあまり多くない<sup>10</sup>。しかし、本稿はハイデガーのこの批判を軸にするため、形相的還元も考察に取り込むことにしたい。そして、そのためにハイデガーに「本質」を見込むことになる。もちろん、ここでの「本質」にはハイデガー独特の意味が担わされている。本稿では十全な議論をすることはできないが、章を改めて幾許か述べておくことにしたい。

## 2. ハイデガーにおける「本質」——「何であるか」と「いかにあるか」の連繫

ハイデガー研究上、前期ハイデガーにおける「本質」は着目されることがあまりなく、ハイデガーは「本質」ではなく「存在」——あるいは「何」ではなく「いかに」——を扱っているのだ、という見解がしばしば見受けられる<sup>11</sup>。たしかに、ハイデガーが「いかに」を重視しているというのは事実である。だが、ハイデガーが「何」を等閑視しているというのは誤りである<sup>12</sup>。そういった「何」の等閑視が見られる主たる理由はおそらく、『存在と時間』第 9 節でハイデガーが「本質」ないし「エッセンティア」を否定的に扱っている、ということにある——「現存在の「本質」は、その実存に存する」(SZ, 42)。しかし、当該節での「何であるか」には丸括弧で「エッセンティア」と付されている。ゆえに、ここでハイデガーが否定的になっているのは、中世のエッセンティア概念であると考えられる。そして、ギリシア概念のラテン語翻訳にかんするハイデガーの批判に鑑みれば、ギリシアの概念に遡れば別の視角が得られると見込めるのである。実際、ハイデガーは『存在と時間』に先立つマールブルク期の講義で、アリストテレスの「ト・ティ・エーン・エイナイ(τὸ τί ἦν εἶναι)」(通常まさに「本質」と訳される語)に着目し、これを「Was sein, wie es schon war」(GA 18, 32)などと翻訳している<sup>13</sup>。そしてこれは、「何であるか」と「いかにあるか」との連携のなかで解釈されているのである<sup>14</sup>。したがって、ハイデガーが批判しているのは、伝統を経て「いかにあるか」との連関が抜け落ちてしまった「エッセンティア」としての「何であるか」である、と想定するこ

とができる。逆に云えば、ハイデガーのコミットする《本質》なるものを措定するのであれば、それは、「何であるか」と「いかにあるか」の連繋から考えられているのである。そして実際、ハイデガーは『存在と時間』の以前以後において、しばしば「何で・いかに・あるか (Was- und Wie-sein)」のことを、端的に「存在」と呼んだり、あるいは「存在体制 (Seinsverfassung)」と呼んだりしている (vgl. GA 9, 131; GA 27, 184; GA 61, 18)。ハイデガーの存在論が狙っているのが存在の分析であることは言を俟たない。そのかぎり、ハイデガーの射程には「何であるか」と「いかにあるか」の双方が含まれているし、その「方法」も両者を捉えるためのものであると考えるべきである。

だが、「何であるか」と「いかにあるか」を分離しないとは、どういうことなのか。私たちのありきたりな存在者の把握は、「何内実 (Wasgehalt)」にのみ拘泥している、とハイデガーは述べる<sup>15</sup>。伝統的に「何であるか」と「いかにあるか」——あるいはエッセンティアとエクシステンティア——は分離可能なものとして考えられてきた。しかし、実は「何であるか」は「いかにあるか」によって規定されているのである。この件を、『根本諸問題』講義での論述をもとに瞥見しておこう。そこでは、エッセンティアとエクシステンティアという概念の地盤として、古代ギリシア以来の「製作的存在観」が見いだされ、そこにおける両者の関係が論じられているのである。

雑駁に云えば、「製作的存在観」において「存在する」ということは、「完成して存在すること」、「運動がその終わりに達しているような存在」を意味しており (GA62, 385)、そして同時に、そういった存在者が「眼前の意のままになっているもの」 (GA 24, 153) であるということを示している<sup>16</sup>。つまり、そもそも存在者が存在すると云われるさいの基本的な視座が、製作が完了して利用可能なかたちで現前している、というものになっているということである。さて、いま述べたのは「製作的存在観」における存在の仕方——エクシステンティア——の契機であった。では、エッセンティアについてはどう説明されるだろうか。古代ギリシアにおいて存在者の「何であるか」を規定する語はさまざまあるが、わかりやすいのはエイドス (形相) という概念であろう。つまり、「製作的存在観」において「何であるか」ということは、製作するにあたって望み見られていた当の存在者の形相によって決まるのであり、これを製作が完

了して利用可能なかたちにすることが肝要になっていたのである。たとえば、「家」と呼ばれる存在者の「何であるか」は、製作の段階で望み見られていたところの〈完成して現前する家の外観〉という根本視点から規定されることになる。

それゆえ、「製作的存在観」において「存在」ないし「いかにあるか」ということは、つまりエクシステンティアは、「完成して利用可能なかたちで現前する」ということと関係しており、「何であるか」つまりエッセンティアは、製作するさいに望み見られていた「完成して利用可能なかたちで現前する」存在者の「外観」と関係していると云える。つまり、存在者の「何であるか」という規定には、じつは「いかにあるか」ということへの指定が書き込まれているのである。存在者の「何であるか」というのは、それが「いかにあるか」ということから無関係に規定されるわけではない、ということである<sup>17</sup>。

こうした「何であるか」と「いかにあるか」との不可分性は、ハイデガーにとり決定的である。たしかにフッサールにおいても、「何」だけでなく「いかに」ということが含みこまれている。しかし、問題はその両者が根本的には分離可能なものとして考えられている、ということにある。フッサールにとっては、対象の「何」というのは、「いかに」がどのように変わろうとも共通のものとして考えられているのである<sup>18</sup>。ハイデガーがフッサールの「還元」に見てとっていた「いかなる存在者の〈何〉もその存在を度外視して規定されうる」

(GA 20, 152) という根本想定と、ハイデガーによるその乗り越えは、両者のあいだの本質的な違いを示しているのである<sup>19</sup>。さて、これまでの分析を踏まえて次章では、ハイデガーの「方法」である「形式的告示」について検討し、この方法が上記の三つの条件を充たしていることを確認することにしたい。

### 3. 「形式的告示」——「何」と「いかに」

「形式的告示 (formale Anzeige)」とは、ハイデガーが初期フライブルク期に「事象的生の解釈学」に取り組むなかで彫琢された概念であり、その後もおよそ 1930 年ころまで、明に暗にハイデガーの思索を規定していた能動的な方法でもある。雑駁に云って、「形式的告示」とは、「生 (Leben)」(ないし存在)



を客観化作用によって「脱生化 (Entlebung)」してしまうのではなく、その生き生きとした在り様を生き生きとしたまま捉えるための方法である。研究史上、これはハイデガー特異の方法として着目され、すでに数多くの研究が蓄積されている<sup>20</sup>。とはいえ、つねに流動しつづけていた当時のハイデガーの思索において、この方法にかんしてもやはり記述が錯綜しており、時代によって構成要素やその規定にかんして変化してしまっているため、解釈は一筋縄ではいかない。ゆえに本稿では、さしあたり視点を制限して「形式的告示」に触れることになるが、さきんじて当の方法について簡潔な説明をしておこう。

さて、「形式的告示」がはじめて明確に定式化されたと云えるのは、1920/21 年冬学期講義「宗教現象学入門」(GA 60 所収)でのことである。そこでは、以下のように述べられている。

現象学とはなにか、現象とはなにか、この件はここではただ形式的に告示することしかできない。あらゆる経験は——経験することも経験されたものも——「現象のうちへ取り入れられる」のであり、つまりつぎの事柄について問うことができる。

1. 現象のうちで経験される根源的な〈何〉について (内実) ,
2. 現象がそのうちで経験される根源的な〈いかに〉について (関連) ,
3. 関連意味がそのうちで遂行される根源的な〈いかに〉について (遂行) (GA 60, 63) .

これら三つは、それぞれ「内実意味 (Gehaltssinn)」・「関連意味 (Bezugssinn)」・「遂行意味 (Vollzugssinn)」とされる<sup>21</sup>。「内実意味」にかんしてはともかく、「関連意味」と「遂行意味」は双方とも「いかに」とされているので、すこし触れておこう。「関連意味」は後に「気づかい (Sorge)」と特徴づけられることになる (vgl. GA 61, 90) 。『存在と時間』では、この「気づかい」は絶えず自己への関係を含みつつ、世界内部的存在者に向かうさいには「配慮 (Besorgen)」、他者に向かうさいには「顧慮 (Fürsorge)」というふうの様態化している。他方、「遂行意味」は銘々の現存在の歴史的状況に応じた、具体的・個別的な性質のものであるが、『存在と時間』では「本来性」・「非本来性」がここに含

まれると考えられる。このとき「形式的告示」は、いわば「何」についても云わず、「いかに」を空虚な仕方でも示示することになる<sup>22</sup>。「形式的—存在論的な規定は、それが規定するものの〈何〉にかんしては何も言明せず、したがって何も先決しない。[...] だが、形式的規定は内実的にまったく無差別であるというまさにこのことによって、現象の関連的側面と遂行的側面にとって宿命論的なのである」(GA 60, 63)。いわば、対象の「何」は、関連の「いかに」を具体的に遂行することによって規定されるのである。

また、「形式的告示」は、1921/22 年冬学期講義『アリストテレスの現象学的解釈——現象学的研究入門』(GA 61)において、「禁止的 (prohibitiv)」であり、また「指示的 (hinweisend)」であるとされている (vgl. GA 61, 141 f.)<sup>23</sup>。私たちの解釈はつねに「墜下 (Ruinzanz)」——『存在と時間』における「頹落 (Verfallen)」にあたるもの——によって先立って浸されてしまっており、出来合いの解釈地平のなかで物事を理解することに安逸するようになっている。「何」と「いかに」にそくして云えば、それは対象の「いかに」に眼を向けず、「何」ばかりを捉える状態である<sup>24</sup>。そして、それを打ち破るために「形式的告示」という方法が必要とされているのである。「形式的告示」は、無反省的な解釈地平から対象の意味内容を規定することを「禁止する」と同時に、どのように解釈を着手していけばよいのか、ということにかんする規定は「指示する」ような、そういう方法なのである。

さて、こういった「形式的告示」は、本稿が掲げた三つの条件に鑑みてどのように理解できるだろうか。まず、(1)「実在性」については、「形式的告示」が「事実的な生」を捉えるための手法であるとすれば、逸されることがないと考えられる<sup>25</sup>。つぎに、(2)「個別性」についてであるが、これも「遂行意味」という個別的・具体的な要素を含みこむため条件をクリアするだろう。そして、(3)の「何であるか」と「いかにあるか」にかんしても、上述の事柄から理解できると思われる。しかもそのさい、ハイデガーとフッサールの方法には、ある対照性が見てとられるのである。つまり、ハイデガーの見るところ、フッサールの還元は「いかに」を保留して「何」を取り上げるものである。それに対して「形式的告示」は、「何」を保留して「いかに」を取り上げるものである。ただし、「何」と「いかに」を統一的に捉えるための手法である「形

式的告示」には、いうなれば「いかに」から「何」への遂行による道筋が見込まれていることは注目すべきである<sup>26</sup>。それは、存在者の「何であるか」を読みとるべき「いかにあるか」を見定め、そこから遂行によって「何であるか」を「充実」することによって、存在者の存在（＝「何で・いかに・あるか」）を適切に規定する道筋であると云える。次章では、『存在と時間』における現存在の分析にかんして、きわめて雑駁にはあるがその道行を確認することにした。

#### 4. 『存在と時間』の「形式的告示」——現存在の「誰で・いかに・あるか」

よく知られているように、『存在と時間』において現存在は、「この存在者にとって、その存在において当の存在そのものが気がかりである」（SZ, 12）というふうに述べられる——これが、同書を貫く現存在の形式的告示的な表現である。また、ここで「気がかりである」とされている存在は、「実存 (Existenz)」と呼びあらわされている (SZ, ebd)。すると、『存在と時間』は、この「形式的告示」を手掛かりにして現存在の「実存」ないし「存在」を解釈して具体化していく作業に従事していると云える。また、第 12 節では、「世界内存在 (In-der-Welt-sein)」という全体的な構造が、現存在の「存在体制」として定められており、そこには三つの契機が見いだされている——つまり、「世界のうちで」・「そのつど世界内存在という様式で存在している存在者」（ないしは「誰」）・「内存在」である (vgl. SZ, 53)。ここで着目すべきは、「世界内存在」の契機のなかに「誰」という要素が含まれている、ということである。というのも、ハイデガーによれば、現存在とは「何」で問われるかわりに「誰」と呼ばなければならないのであり、そのかぎり「誰」というのは現存在における「何」と見なすことができるからである<sup>27</sup>。さきに触れたように、ハイデガーは『存在と時間』の以前から「何で・いかに・あるか」を「存在」ないし「存在体制」と見なしていたのであった。それゆえ、現存在の存在体制は世界内存在とされているが、それは現存在の「誰で・いかに・あるか (Wer- und Wie-sein)」と云うことができるだろう。『存在と時間』における現存在の実存論的分析論が目指しているのは、現存在の「誰で・いかに・あるか」を適切に捉えるべく、

さきの形式的告示にしたがい、現存在の「誰であるか」を捉えるにふさわしい「いかにあるか」を解釈していき、それをもって現存在の存在を定めること（そして、その意味を析出すること）なのである。以下では、その流れを簡単に追っていく。

さて、現存在の「誰」がはじめて表立って問題とされているのは、『存在と時間』の第 4 章である。そこでは、日常的に現存在しているのは誰か、ということが主題となっているが、そのさい現存在の「誰」が存在論的にも存在的にもまだ問題であるとされる。また当該箇所では、「自我についてただ、[...] 或るものについての非拘束的な形式的告示という意味で理解することだけが許される」(SZ, 116)とも云われている。そうすることでハイデガーが試みているのは——形式的告示のもつ「禁止的機能」にしたがい——、伝統的な「自我」概念にひそむ「眼前存在」ベースの捉え方をはじくことである (vgl. SZ, 114f.)。つまりそれは、現存在の「誰であるか」をその「いかにあるか」に眼を向けることなく規定する、という手法の戒めである——「「自我」が現存在の実存的な規定性なのだとしたら、この規定性は実存論的に解釈されなければならない。すると、「誰」ということは、現存在の特定の存在の仕方を現象的に提示することによってしか答えられない、ということになる」(SZ, 177)。そうして、ハイデガーは最終的に同章のなかで、日常的な現存在の「誰」にたいして「ひと (das Man)」ないし「ひと—自己 (Man-selbst)」という答えを与えている (SZ, 129)。しかし、この「ひと—自己」は「世界」の側からみずからを理解しているがゆえに非本来的なものであるとされ、本来的な自己とは対置させられているのである。

こうした本来的な自己の探求は、「不安 (Angst)」や「先駆的決意性 (vorlaufende Entschlossenheit)」の議論を承けつつ、最終的には『存在と時間』第 64 節において論じられることになる。第 40 節で論じられる「不安」という根本情態性においては、現存在が日常的にみずからの存在を理解するさいに縁としている世界が無に沈みこみ、現存在が単独化される。それによって現存在には、「本来性 (Eigentlichkeit)」と「非本来性 (Uneigentlichkeit)」という可能性が開示されるのである——「こうした単独化は、現存在をその頽落から連れ戻し、現存在にたいして、本来性と非本来性をその存在の可能性としてあらわにするので

ある」(SZ, 191)<sup>28</sup>。しかし、留意すべきなのは、不安は「本来性」と「非本来性」という可能性を開示するだけだ、ということである。つまり、現存在は不安になれば即座に本来的になるという塩梅にはなっていないのである。この本来性への「実存的な変容」については、『存在と時間』第 2 編における「死の議論」や「良心論」を経て、「先駆的決意性」において達せられることになる。本来性ないし先駆的決意性とは、現存在の「誰であるか」を規定する——あるいは、それを読みとるにふさわしい——「いかにあるか」なのである。それが明瞭になっているのは、同書第 64 節「気づかいと自己性」である。そこではまさに、現存在の「自己性 (Selbstheit)」ないし「誰」は、現存在の本来的な「いかにあるか」から、つまり、先の不安を経て達せられる本来の実存(先駆的決意性)によってのみ定まる、とされているのである——「自己性は、実存論的には、本来的な自己存在可能にそくしてのみ、つまり、気づかいとしての現存在の存在の本来性にそくしてのみ読みとられうる」(SZ, 322)。ハイデガーにとって、現存在の本来的な「何であるか」ないし「誰であるか」は、「主観」や「実体」や「人間」といった事象にそくさないものが何らか外部から押し付けられることによって定まるのではなく、ひとえに銘々の現存在がみずからの実存を本来的に遂行することのみ定まるのである。

そうして現存在の「誰で・いかに・あるか」を適切に規定したハイデガーは、そこから現存在の存在の意味である「時間性 (Zeitlichkeit)」を析出するのである。そのさい、「本質」について述べたさいに触れた、「ト・ティ・エーン・エイナイ」ないし「was sein, wie es je schon war」を想起させる表現がつかわれていることは興味深く重要なことである。

先駆的決意性は、現存在をその本質的な負い目ある存在において理解する。この理解が意味しているのは、負い目のあることを実存しながら引きうけるということであり、無性の被投的な根拠として存在することである。とはいえ、被投性を引きうけるということが意味しているのは、現存在が、そのつどすでに存在していたとおりに [wie es je schon war] 本来的に存在することである。しかし被投性の引きうけが可能になるのはただ、将来的な現存在がそのもっとも固有な「そのつどすでに存在していたとおりに」

存在しうる, すなわち「存在」でありうるというようにしてのみである (SZ, 325f.) .

## 5. おわりに

以上, 本稿ではハイデガーの「形式的告示」という方法について, 『序説』講義におけるフッサールの還元批判を分析することで, とりわけ「何であるか」と「いかにあるか」に焦点を当てて分析してきた. そのさい, 同講義での批判から, ハイデガーの方法にかんして三つの条件を取り出した——すなわち, 1) 「実在性」を度外視しないこと, 2) 「個別相」を度外視しないこと, 3) 「何であるか」と「いかにあるか」を統一的に探求すること, である. なかでも「何であるか」と「いかにあるか」の連繋は, ハイデガーにとってきわめて重要なものであったのである. またそのさい, フッサールの還元が「(いかに) あるか」を保留して「何であるか」を取り出すのにたいして, ハイデガーの形式的告示は「何であるか」を保留して「いかにあるか」を取り出す (そしてそれをもとに「何であるか」を「充実」する) という対照性があることを指摘した. そして, 「形式的告示」についての記述を参照しつつ, この方法が上記の諸条件を充たすことを示し, 『存在と時間』における分析を瞥見することで確認とした. ハイデガーが目指していたのは, 「いかなる存在者の〈何〉もその存在を度外視して規定されうる」 (GA 20, 152) という根本想定——あるいは「何であるか」と「いかにあるか」の乖離に対抗し, 「何で・いかに・あるか」=「存在」を探求することだったのである.

## 註

- 1 本稿は「2019 年度 哲学若手研究者フォーラム」における発表を大幅に改稿したものである.
- 2 このようなエポケーの捉え方については, フッサール側からも反論があるだろうが, 紙幅の都合もあり本稿では扱えない. ただし, ハイデガーは同講義の別の箇所でも, またちがうエポケー解釈を示しているようにも見受けられるし, たとえばザハヴィはこの解釈を正しいものと見なしている (vgl. GA 20, 136; Zahavi (2017), Ch. 3) .
- 3 これに類する事柄は他の箇所でも云われている (vgl. SZ, 117; GA 20, 205 f.) .
- 4 ハイデガーはこの箇所でも「いかにあるか (Wie-sein) 」といった云い方はしていないた

- め、本稿がそう換言することに疑問を持たれるかもしれない。しかし、ハイデガーは「(事 [Daß]) の意味と様式」や「存在する仕方」という云い方をしている。そのかぎり、ここで「いかにあるか」という表現を用いることは認められるだろう。また、ハイデガーは 1927 年夏学期講義『現象学の根本諸問題』(GA 24)において、通常「事実存在 (Daß-sein)」と訳されるエクシステンティアを「いかにあるか (Wie-sein)」として述べてもいる (vgl. GA 24, Kap. 2.)。
- <sup>5</sup> ここでの「実在性」という表現は、ハイデガーにおけるエクシステンティアつまり眼前存在の意味ではなく、ひろい意味で対象が現に存在する、といった意味で用いている。
- <sup>6</sup> とはいえ、ハイデガーは同種の批判の適用例として「音」や「色」を挙げていることに鑑みても (vgl. GA 20, 151)、この批判は現存在以外の存在者にも当てはまる可能性がある。Bernet (1994)が「還元」のひとつと見なす「道具の欠損状況」などは、そういった可能性に絡むものであるが、詳細は別稿に委ねざるをえない。
- <sup>7</sup> 晩年のゼミナールの記録でハイデガーは、フッサールにとって「存在」は「対象存在」しか意味しておらず、これは「主観性という次元ないし(空間)における現前存在」だと述べている (GA 15, 378)。また、Caputo (1992)は、ハイデガーから見たフッサールは「存在」について独断論的であり、「実在」するならば「構成されている」、という発想にあると云う。そして、「実存」という意味での「実在」(事実性)は、構成される実在とは異なることを指摘する。
- <sup>8</sup> ただし、ハイデガーは Wie-sein や Seinsweise といった表現をひろく用いており、階層のちがうものを含みこんでいる。本稿で十分に取り扱うことはできないが、たとえば、「実存」「手許性」「眼前性」といった半ば領域的な存在様態と、「本来性」「非本来性」という「実存」内部での存在様態とは区別されるべきだろう。
- <sup>9</sup> たとえばトゥーゲントハットは、眼前存在にかんする「保留」をもとにして、『存在と時間』におけるハイデガーは還元を前提としている、という立場にたっている (vgl. Tugendhat (1970), 262f.)。しかしながら、『序説』講義でのハイデガーの議論を踏まえるならば、「存在(様式)」の度外視という意味での「還元」はハイデガーに帰することができないだろうし、存在様態の「交代」という線で読むほうが穏当であると思われる。もっとも、トゥーゲントハットの著作が刊行されたのは 1970 年であり、1975 年の『序説』講義出版以前であるから、資料上の制約は加味しなければならないだろう。
- <sup>10</sup> たとえば Crowell (2001)は、ハイデガーの還元批判によって棄却されるのは形相的還元のみだ、としているが、その一方で『存在と時間』での分析が現存在の普遍的な構造を取りだしているとも考えている (vgl. Crowell (2001), 199, 201)。また、若見 (2007)は、形式的告示の形成がフッサールの「類的普遍化」と「形式化」に関連することに着目しつつ、初期フライブルク期の講義におけるハイデガーの分析に形相的還元を見込んでいる (vgl. 若見 (2007), 25)。
- <sup>11</sup> Vgl. 有馬 (2012)、Bauer (2010)。
- <sup>12</sup> 同様の見解に立つものとして、たとえば Heeffner (2010)は端的につきのように述べている—「だが、ハイデガーが主としてさまざまな存在様態に関心を集中させているからといって、ハイデガーが何性として理解される存在を無視していると主張するのは誤りである」(Heeffner (2010), 189)。ただし、同論文は「真理論」についてのものであるため、この論点はそれ以上展開されていない。
- <sup>13</sup> 『存在と時間』においても、»was sein, wie es schon war«に類した表現は要所で登場して

おり、重要な役割を担っていると想定される—「だが、被投性を引きうけるということが意味しているのは、現存在が、そのつどすでに存在していたとおりに[*wie es je schon war*] 本来的に存在することである」(SZ, 325)。また、「何であるか」と「いかにあるか」の統一を「本質」とする発想は、『存在と時間』以降も、たとえば「芸術作品の根源」などに見られる—「あるものが、それが存在しているありさまで何であるか、ということ、私たちは本質と呼ぶ[*Das, was etwas ist, wie es ist, nennen wir sein Wesen*]」(GA 5, 1)

- <sup>14</sup> この概念にかんする詳細な分析としては、阿部 (2015) の第 4 章を参照のこと。
- <sup>15</sup> Vgl. GA 20, 206.
- <sup>16</sup> 「製作的存在観」についてのさらに詳しい記述は、阿部 (2015) や細川 (2000) を参照せよ。
- <sup>17</sup> ハイデガーはたとえば、つぎのように述べている—「エッセンティアは、ウーシアの逐語的な翻訳であるにすぎない。〈何であるか〉つまりレアリテートにたいして用いられるこのエッセンティアという表現は、それと同時に、存在者の特有の存在の仕方を、つまり存在者が意のままになることを […] 表現している」(GA 24, 153)。
- <sup>18</sup> たとえば『論理学研究』ではすでにつぎのように云われている—「志向的な対象性がさまざまな作用のなかで同一であることは明らかである。同一の事象が、表象においては表象され、判断においては妥当なものとして指定され、願望においては願望され、問いにおいては問われている」(Hua. XIX/1, 427)。
- <sup>19</sup> これは、荒畑 (2019) が示唆している事柄と関連するように思われる。荒畑 (2019) は、「志向的作用の質料と性質の区別」という根本的な想定—ドグマ—をとりあげ、この区別の普遍化・徹底化が「還元」に繋がることを指摘し、そのうえで当のドグマを批判している。同論文ではハイデガーは触れられていないが、この批判は『序説』講義におけるハイデガーの還元批判と結びつくものように思われる。
- <sup>20</sup> Vgl. 岡本 (2006); 齋藤 (2015); 田村 (2013); 若見 (2007); Burch (2011); Crowell (2001); Imdahl (1994); Streeter (1997).
- <sup>21</sup> 「内容意味」・「関連意味」・「遂行意味」については、しばしばフッサールの「ノエシス」や「ノエマ」との連関が示唆される (vgl. Crowell (2001), 142 f.; 池田 (2009); 齋藤 (2015); 若見 (2004))。そのさい、「遂行意味」がハイデガー独特のものとされるが、池田 (2009) の示唆するとおり、フッサールにこういった着想が欠けているわけではない。また、『イデーナ I』における「全きノエマ」についての分析などではフッサール本人の言葉ではものもあるが—、ノエマにおける「意味核」・「定立諸様相」・「時間化諸様相」という三つ組みが取りだされている (vgl. Hua. III/1, Abs. 3, Kap. 3; とくに同書邦訳 (みすず書房) の同章に付された訳注 24 も参照のこと)。そのうち「時間化諸様相」は、いわば「対象」がどのように充実されるかにかかわっており、遂行・具体相への着目もつよい (これについては、渡邊 (1984) を参照せよ)。また、この件と絡めて付言すれば、クローウェルは「遂行意味」にかんして、フッサールの『論理学研究』における「本来的思考」と「非本来的思考」との関係を示唆している (vgl. Crowell (2001), 142)。
- <sup>22</sup> Vgl. 岡本 (2006) : 「形式的告示」とは、ある対象に対してその対象が「何 (Was)」であるかを規定してしまわずに、その対象が「いかに (Wie)」あるのか、その状態を記述する方法である」(8)。
- <sup>23</sup> なお、齋藤 (2015) は、ここに「対抗的機能」も含めて三つとしている。



- <sup>24</sup> Vgl. Streeter (1997), 415; GA 20, 206:「他方、私たちは存在者をさしあたりつねにその「何一内実」から名付けており、それに特有の存在を未規定のままにしている。というのも、私たちはそれを自明なものを見なしているからである」。
- <sup>25</sup> ハイデガーは、1921/22 年冬学期講義において、これにかんして以下のように述べている—「[生は存在]「しなければならぬ」のか—「生」は事実に現に「存在する」。「これ」を取り去るような傾向があるのだろうか。世界への墜下的な逃避、対象から離れること、フッサールの「還元/連れ戻し [Re-duktion]」がもつ積極的な意味 (GA 61, 39) 。
- <sup>26</sup> 他方、フッサールの還元にかんしてハイデガーが云うには、「〈何 [Was]〉ということからは、私が〈事 [Daß]〉の意味と様式について何事かを知ることにはけっしてない」 (GA 20, 151 f.) 。
- <sup>27</sup> Vgl. SZ, 45. また、『根本諸問題』講義ではつぎのように云われている—「私たち自身がそれであるところの存在者、つまり現存在は、そのものとしては、〈それは何か〉という問いでもってそもそも問い糺されえない。こうした存在者にかんして私たちがアクセスを手にするのは、〈それは誰か〉と問うときだけである」 (GA 24, 169) 。ただし、ハイデガーは「誰」ということと「何」ということの関係については曖昧なところがある。というのも、ハイデガーは結局「誰」を「存在の仕方」として扱い、現存在に一切の「何性」を見込まないようにしていると見受けられる箇所もあるからである (vgl. SZ, 117; GA 20; 207, 325) 。
- <sup>28</sup> ここで付言しておけば、不安においては本稿が掲げた条件の 1 と 2 がクリアされているということである。1) 不安は、「実在性」を度外視することがない。もちろん、ここでの「実在性」は現存在にかんするものであり、眼前存在者のそれとは異なる。現存在の「実在性」をハイデガーの術語で表現すれば、それは「事実性 (Faktizität)」と云える。事実性とは、「現存在が存在し、存在せざるえないこと」 (SZ, 135) を意味している。そして、不安はこの「事実性」をもっとも先鋭化したかたちで露呈するのである。2) 不安は、「個別性」を度外視することがない。むしろ、不安こそは、みずからのもっとも固有な実存に気づかせる機会として、「ひと (das Man)」に埋没しがちな現存在を「単独化」するのである。「不安は現存在をその固有な世界内存在へと単独化し、その固有な世界内存在は、理解するものとして、本質的にさまざまな可能性へとみずからを投企する」 (SZ, 187) 。また、「存在様態間の交代」と本稿が呼んだものも関係してくる。ハイデガーにおける「不安」は、フッサールの還元とちがって、「定立された存在者」と「定立する存在者」の差異 (ないし存在領域の差異) を明らかにしているわけではなく、現存在という存在者における存在様態の差異を明らかにしていると云える。この場合の存在様態とは、「本来性 (Eigentlichkeit)」と「非本来性 (Uneigentlichkeit)」 (あるいは「誰」にそくして言えば、「本来的自己」と「非本来的自己」) である。

## 参考文献

### ○ M・ハイデガーの著作

: 『存在と時間』については略号 SZ の後に頁数を、『ハイデガー全集』については略号 GA の後に巻号と頁数を記す。なお、既訳を適宜参照した。

- *Sein und Zeit*, 19. Aufl., Tübingen: Max Niemeyer, 2006.
- *Gesamtausgabe*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1975 ff.
  - GA 5: *Holzwege*, hrsg. v. F.-W. von Herrmann, 1977.
  - GA 9: *Wegmarken*, hrsg. v. F.-W. von Herrmann, 1976.
  - GA 15: *Seminare*, hrsg. v. C. Ochwadt, 1986.
  - GA 18: *Grundbegriffe der aristotelischen Philosophie*, hrsg. v. M. Michalski, 2002.
  - GA 20: *Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs*, hrsg. v. P. Jaeger, 1979.
  - GA 24: *Die Grundprobleme der Phänomenologie*, hrsg. v. F.-W. von Herrmann, 1975.
  - GA 27: *Einleitung in die Philosophie*, hrsg. v. O. Saame & I. Saame-Spiedel, 1996.
  - GA 58: *Grundprobleme der Phänomenologie*, hrsg. v. H.-H. Gander, 1992.
  - GA 60: *Phänomenologie des religiösen Lebens*, hrsg. v. M. Jung / T. Regehly / C. Strube, 1995.
  - GA 61: *Phänomenologische Interpretation zu Aristoteles. Einführung in die phänomenologische Forschung*, hrsg. v. W. Bröcker & K. Bröcker-Oltmanns, 1985.
  - GA 62: *Phänomenologische Interpretation ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik*, hrsg. v. G. Neumann, 2005.

## ○ その他の著作・論文

: 著者の姓の後に丸括弧内で刊行年を記す。

- 阿部将伸 (2015) : 『存在とロゴス——初期ハイデガーにおけるアリストテレス解釈』, 月曜社.
- 荒畑靖宏 (2001) : 「還元と二つの主観性」, 『現象学年報』 (17) , 121-128 頁.
- ——— (2019) : 「現象学の2つのドグマ」, 『フッサール研究』 (16) , 61-76 頁.

- ・有馬善一 (2012) : 「存在の問いをめぐって——アリストテレス, フッサールとハイデガー——」, 宮原勇 (編) 『ハイデガー『存在と時間』を学ぶ人のために』, 世界思想社, 36-60 頁.
- ・池田喬 (2009) : 「志向性・語り・行為——ハイデガーの現象学的行為論——」, 『ヨーロッパ文化研究』(28), 3-30 頁.
- ・岡本敦之 (2006) : 「形式的告示と現象学的解体——初期ハイデガーの思索に見られる二つの問題とその克服——」, 『大谷学報』(85; 4), 1-29 頁.
- ・齋藤元紀 (2012) : 『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』, 法政大学出版局.
- ・田村未希 (2013) : 「前期ハイデガーの方法概念——初期フライブルク講義における「歴史性を理解する」という課題と方法論的形成について——」 『現象学年報』(29), 133-140 頁.
- ・細川亮一 (2000) : 『ハイデガー哲学の射程』, 創文社.
- ・丸山文隆 (2019) : 「ハイデッガー『存在と時間』における死への先駆の役割について」, 哲学若手研究者フォーラム『哲学の探求』(46), 119-137 頁.
- ・若見理江 (2004) : 「ハイデガーの現象学的還元」, 『現象学年報』(20), 159-166 頁.
- ・———— (2007) : 「ハイデガーにおける形式的告示の形成過程」, 『大谷学報』(86; 2), 18-36 頁.
- ・渡邊二郎 (1984) : 「「全きノエマ」と「全き格」」, 『現象学年報』(1), 63-76 頁.
  
- ・ Bauer, Patrik (2010): „Vom *Was* zum *Wie*. Heideggers Kritik an Husserl als Neukonstitution eines dynamischen Phänomenologiebegriffs“, in: F. Rese (hrsg.), *Heidegger und Husserl im Vergleich*, Frankfurt a. M.: Vittorio Klostermann, 2010, s. 95-113.
- ・ Bernet, Rudolf (1994) (transl. by François Renaud): “Phenomenological Reduction and the Double Life of Subject”, in: T. Kisiel & J.-v. Buren (eds.), *Reading*

*Heidegger from the Start: Essays in His Earliest Thought*, State University of New York Press, pp. 245-267.

- Burch, Matthew (2011): “Existential Sources of Phenomenology: Heidegger on Formal Indication”, *European Journal of Philosophy*, 21 (2), 2011, pp. 258-278.
- Caputo, John (1992), “The question of being and transcendental phenomenology: reflections on Heidegger’s relationship to Husserl”,,, in: C. Macann (ed.), *Martin Heidegger Critical Assessments II*, pp. 326-344.
- Crowell, Steven (2001), *Husserl, Heidegger, and the Space of Meaning: Paths toward Transcendental Phenomenology*, Northwestern University Press.
- Husserl, Edmund (1984) (Hua. XIX/1): *Logische Untersuchungen. Zweiter Band: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, hrsg. v. U. Panzer, Springer.
- Imdahl, George (1994): „,Formale Anzeige“ bei Heidegger“, *Archiv für Begriffsgeschichte*, 37, 1994, s. 306-332.
- Russell, Matheson (2008): “Phenomenological reduction in Heidegger’s Sein und Zeit: a new proposal”, *Journal of the British Society for Phenomenology*, 39 (3), pp. 229-248.
- Streeter, Ryan (1997): “Heidegger’s formal indication: A question of method in Being and Time”, *Man and World* (30), 1997, pp. 413-430.
- Tugendhat, Ernst (1970), *Der Wahrheitsbegriff bei Husserl und Heidegger*, de Gruyter.
- Zahavi, Dan (2017) : *Husserl’s Legacy: Phenomenology, Metaphysics, and Transcendental Philosophy*, OUP. [邦訳：中村拓也 訳『フッサールの遺産』, 法政大学出版局, 2018年. ]